

流山市自立支援協議会こども部会研修会
2026年1月20日

心理検査の読み解き方 (WISC-IV、田中ビネー知能検査V)

社会福祉法人こころ
飯田 満久
公認心理師／臨床心理士

本日の内容

1 心理検査について

2 田中ビネー知能検査とWISCについて

3 事例紹介（検査の実施と数値からの読み取り）

4 知能検査の限界について～留意点～

心理検査とは？



心理検査の種類

<知能検査>

田中ビネー知能検査、WPPSI-Ⅲ、WAIS-IV、WISC-IV、WISC-V、KABC-Ⅱ、DN-CASなど

<発達検査>

新版K式発達検査、KIDS乳幼児発達スケール、新版S-M社会生活能力検査など

<人格検査>

質問紙法（MMPI、YG性格検査など）、投影法（ロールシャッハ・テスト、バウムテストなど）

<特定の症状・特性を測る検査>

SDS（自己評価式抑うつ性尺度）、CES-D（うつ病自己評価尺度）など

*知能検査と発達検査の違い

知能検査: 主に認知能力や知的能力を測り、「知能指数 (IQ)」を算出します。

発達検査: 運動、言語、社会性など生活全般の発達の程度を測り、「発達年齢」や「発達指数 (DQ)」を算出します。

サポートファイルの中で見かける心理検査（赤字のもの）

<知能検査>

田中ビネー知能検査、WPPSI-Ⅲ、WAIS-IV、WISC-IV、WISC-V、KABC-Ⅱ、DN-CASなど

<発達検査>

新版K式発達検査、KIDS乳幼児発達スケール、新版S-M社会生活能力検査など

<人格検査>

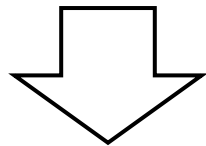
質問紙法（MMPI、YG性格検査など）、投影法（ロールシャッハ・テスト、バウムテストなど）

<特定の症状・特性を測る検査>

SDS（自己評価式抑うつ性尺度）、CES-D（うつ病自己評価尺度）など

田中ビネー知能検査とWISCについて

田中ビネーとWISCの共通点



どちらも「知能検査」と呼ばれるタイプの検査です。
知能指数（IQ）を測定することができます。



田中ビネー知能検査とWISCの違い

田中ビネー

開発者：ビネーとシモン（原型）→日本版を田中寛一氏が改訂

対象年齢：2歳～成人（89歳）まで

目的・用途：発達段階全体をみる（発達年齢を出す）

評価の特徴：発達の遅れや進みを段階的に把握
年齢尺度を用いて「精神年齢」を算出する
「精神年齢 ÷ 生活年齢 × 100」

実施時間の目安：約30～60分程度

WISC

開発者：ウェクスラー

対象年齢：5歳0ヶ月～16歳11ヶ月

目的・用途：受験者の強みや弱みを通して、
受験者のつまづき（問題、主訴）の能力的な原因と対応策を知ること

評価の特徴：認知のバランス・得意不得意を細かく分析
標準得点をもとにした「偏差IQ」を用いる

WISC-Vでは、5つの指標の得点を出す
（言語理解・視空間・流動性推理・ワーキングメモリー・処理速度）

WISC-IVでは、4つの指標の得点を出す
（言語理解・知覚推理・ワーキングメモリー・処理速度）

実施時間の目安：約60～90分程度

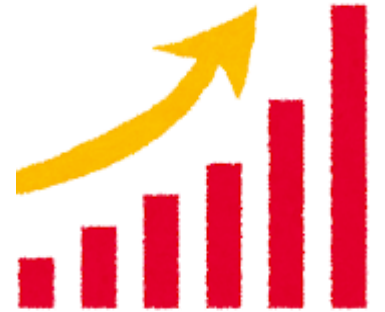


それぞれの検査のイメージ

【田中ビネー】

「この子は年齢のわりにどのくらいの知的発達段階にあるか？」を見る。

→ 発達の“高さ”を測るイメージ（縦の発達）



【WISC】

「この子の考え方の特徴は？何が得意・苦手？」を見て、

つまづき（問題や主訴）の原因や対応策を検討していく。

→ 発達の“バランス”や“質”を測るイメージ（横の発達）



それぞれの検査の使い方の例



田中ビネー 用いられる場面

☆就学前相談（保育園・幼稚園）

年齢尺度式のため、発達年齢が明確に出る。生活年齢との比較がしやすい。



☆知的発達の遅れの有無を判断

「何歳レベルの課題ができるか」が分かる。

知的障害の診断補助に用いられる。

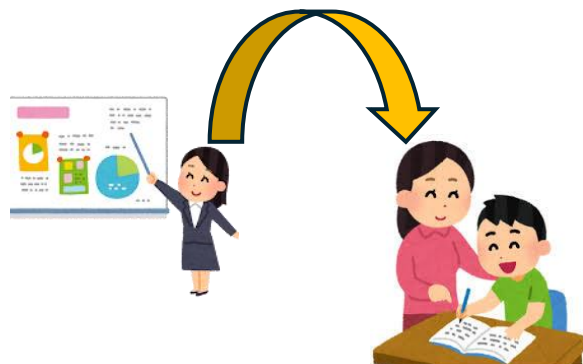
→療育手帳の等級の判定など



WISC 用いられる場面

☆小・中・高生の学習困難など
得意・不得意のパターン分析ができる。

学習支援方針（例：聞いて覚えることが苦手→メモを活用など）に役立つ。



田中ビネー知能検査について



サポートファイルで見える際に、記載されていること

<田中ビネー知能検査の場合>

パターン①

田中ビネー知能検査Ⅴ 実施日　〇〇年△△月□□日	生活年齢 CA	__歳__か月 ：	精神年齢 MA	__歳__か月 ：	知能指数 IQ	〇〇
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		
所見						

パターン②

1 検査実施場所等

検査実施場所及び検査日	検査名	結果		特記事項
〇〇市児童発達支援センター 〇〇年△△月□□日	田中ビネー知能検査Ⅴ	生活年齢 精神年齢 知能指数	歳　か月 歳　か月 〇〇	

2 所見

パターン③

記

- 1 氏名 ○○ ○○
- 2 生年月日 △△年△△月△△日
- 3 情報提供事項

田中ビネー知能検査V（□□年□□月□□日実施）

生活年齢 歳 か月

精神年齢 歳 か月

知能指数 × ×

- 4 使用目的
☆☆のため

田中ビネー知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

生活年齢（CA：Chronological Age）→実際の暦年齢

精神年齢（MA：Mental Age）→知能の水準を年齢で表したもの

田中ビネー知能検査Ⅴ 実施日　〇〇年△△月□□日	生活年齢 CA	__歳__か月 :	精神年齢 MA	__歳__か月 :	知能指数 IQ	〇〇
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		
所見						

基底年齢→ある年齢級に属する問題すべてに合格した場合、その一つ上の年齢のこと

1 歳 級	1	チップ差し
	2	犬さがし
	3	身体各部の指示（客体）
	4	
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
	12	名称による物の指示

2 歳 級	13	動物の見分け
	14	語彙（物）
	15	大きさの比較
	16	
	17	
	18	
	19	
	20	
	21	
	22	
	23	
	24	語彙（絵）

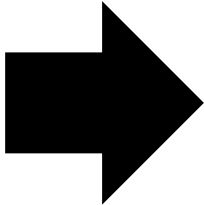
3 歳 級	25	語彙（絵）
	26	小鳥の絵の完成
	27	
	28	
	29	
	30	
	31	
	32	
	33	
	34	
	35	
	36	数概念（3個）

4 歳 級	37	語彙（絵）
	38	順序の記憶
	39	
	40	
	41	
	42	反対類推（B）

5 歳 級	43	数概念（10個まで）
	44	絵の不合理的
	45	
	46	
	47	
	48	左右の弁別

1歳級～3歳級までは12項目

4歳～13歳級は6項目



1～3歳級までは、
1つの項目を1か月カウントとします

4歳～13歳級は、
1つの項目で2か月カウントします

田中ビネー知能検査Ⅴ	生活年齢	__歳__か月	精神年齢	__歳__か月	知能指数	〇〇
実施日 〇〇年△△月□□日	CA	:	MA	:	IQ	
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		
所見						

基底年齢→ある年齢級に属する問題すべてに合格した場合、その一つ上の年齢のこと

1 歳 級	○	1	チップ差し
	○	2	犬さがし
	○	3	身体各部の指示（客体）
	○	4	
	○	5	
	○	6	
	○	7	
	○	8	
	○	9	
	○	10	
	○	11	
	○	12	名称による物の指示

3 歳 級	○	25	語彙（絵）
	○	26	小鳥の絵の完成
	×	27	
	×	28	
	×	29	
	○	30	
	×	31	
	×	32	
	×	33	
	×	34	
	×	35	
	×	36	数概念（3個）

4 歳 級	○	37	語彙（絵）
	×	38	順序の記憶
	×	39	
	×	40	
	×	41	
	×	42	反対類推（B）
5 歳 級	×	43	数概念（10個まで）
	×	44	絵の不合理的
	×	45	
	×	46	
	×	47	
	×	48	左右の弁別

2 歳 級	○	13	動物の見分け
	○	14	語彙（物）
	○	15	大きさの比較
	○	16	
	○	17	
	○	18	
	○	19	
	○	20	
	×	21	
	○	22	
	○	23	
	○	24	語彙（絵）

○の部分は合格 ×の部分は不合格



例 すべて合格の年齢級は1歳級のため、基底年齢は1歳 + 1 = 2歳 ということになります。



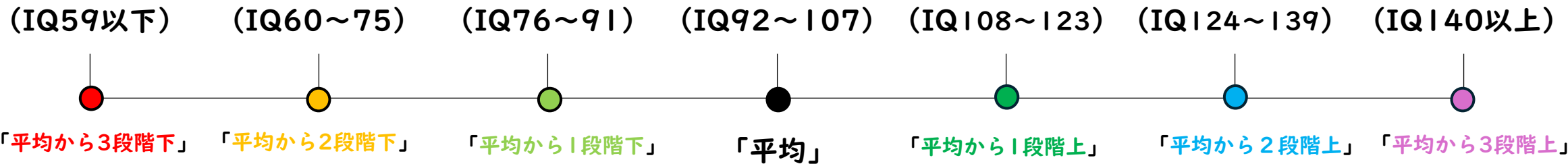
またこの児童の精神年齢は、

2歳（24か月）
+ 11か月
+ 3か月
+ 2か月 で40か月



精神年齢は3歳4か月（40か月）ということになります。

知能区分・・・言葉で数値（IQ）を区分で表したもの



田中ビネー知能検査Ⅴ 実施日 ○○年△△月□□日	生活年齢 CA	__歳__か月 :	精神年齢 MA	__歳__か月 :	知能指数 IQ	○○
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		
所見						

IQとDIQについて

田中ビネー知能検査Ⅴ 実施日　〇〇年△△月□□日	生活年齢 CA	__歳__か月 :	精神年齢 MA	__歳__か月 :	知能指数 IQ	〇〇
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		
所見						

知能指数 (IQ : Intelligence Quotient)

$$\text{IQ} = \frac{\text{精神年齢 (MA)}}{\text{生活年齢 (CA)}} \times 100$$



しかし、、、従来の比例によるIQは、年齢が異なると同じIQでも同じ知能の高低を表すわけではないだろうという短所がありました。

例 CAが5歳0か月で、MAが6歳0か月の場合

$$\text{IQ} = \frac{72\text{か月}}{60\text{か月}} \times 100 = 120$$

CAが10歳0か月で、MAが12歳0か月の場合

$$\text{IQ} = \frac{144\text{か月}}{120\text{か月}} \times 100 = 120$$

同じIQ120を示していても、、、

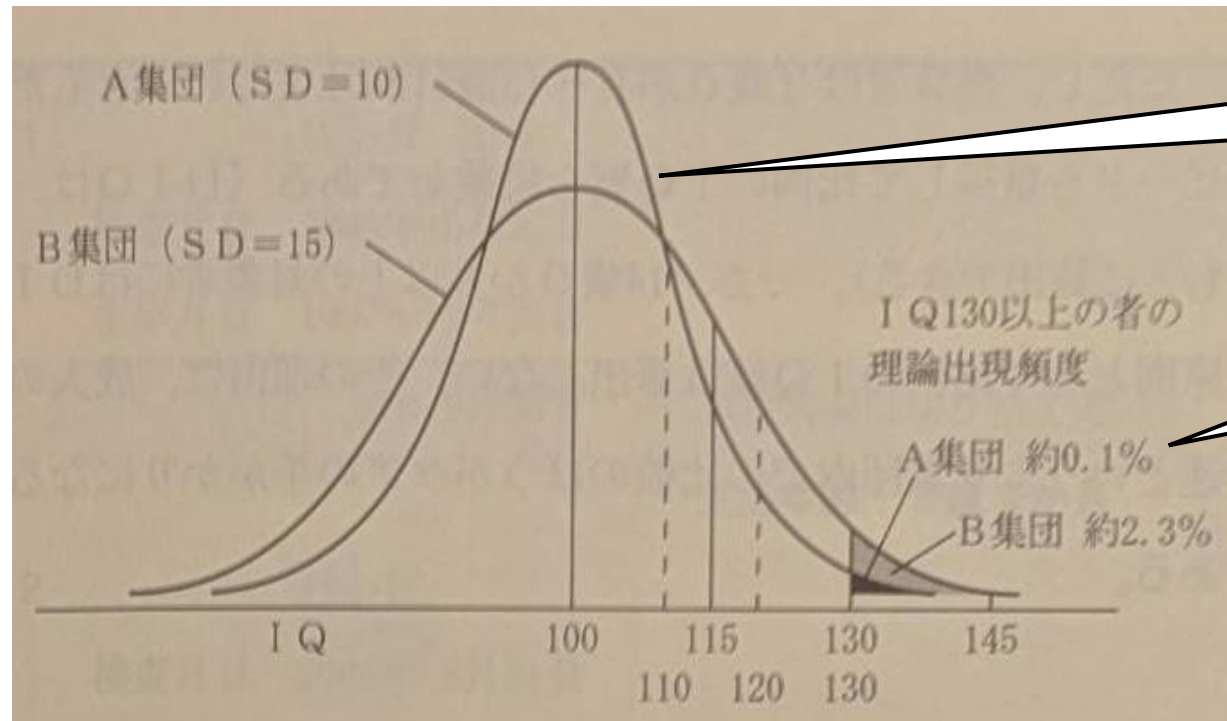
前者は精神年齢が1歳程度進んでいるが、
後者はその倍の2歳程度進んでいると
判断されます。

つまり、比例によるIQでは、
検査を実施したときの子どもの生活年齢が
明示されることが重要事項となる。

偏差知能指数 (DIQ : Deviation Intelligence Quotient)

$$\text{DIQ} = \frac{\text{個人の得点 (MA)} - \text{同じ年齢集団の平均}}{1 / 16 \times \text{同じ年齢集団の標準偏差 (SD)}} + 100$$

* 田中ビネー知能検査VのDIQの算出方法



A集団はばらつきが小さく、
B集団はばらつきが大きい

A集団でIQ130以上は0.1%で
B集団はIQ130以上は2.3%となっている。



A集団では、IQ130以上の人は、1000人に1人
B集団では、IQ130以上の人は、100人に2人

ということになってしまう。

標準偏差の異なる2集団におけるIQの分布の比較
『田中ビネー知能検査V採点マニュアル』2003 より

「知能指数」には、
「精神年齢と生活年齢との比で求めるIQ」
と
「偏差値を基礎とするDIQ」



があるということになります。



Q.田中ビネー知能検査Vにおいては、どちらの知能指数を用いるのでしょうか？

集団内での個人の位置（順位）を知るという点では、DIQが優れています。

しかし、従来のIQは生活年齢を基盤にして、知能の発達がどの程度進んでいるか、遅れているか、といった知能の発達のスピードを表す縦の尺度として捨てがたいものでした。

そこで、田中ビネー知能検査Vでは、

☆2歳0か月～13歳11か月までの対象者には、IQ値を算出する
『発達のスピードを重視』

☆14歳0か月以上の対象者には、DIQを算出する
『発達の遅速というより集団内での比較の方がケアの手がかりになるという考え』

IQで算出してもDIQで算出しても変わらないんじゃないの？



【例：CAとMAが5歳0か月の時】

$$\text{IQ} = \frac{\text{精神年齢 (MA)}}{\text{生活年齢 (CA)}} \times 100$$

$$\text{IQ} = \frac{60\text{か月 (MA)}}{60\text{か月 (CA)}} \times 100 \Rightarrow \text{IQ } 100$$

CAとMAが5歳0か月の時（田中ビネー知能検査VでDIQを算出した場合）

$$\text{DIQ} = \frac{\text{個人の得点 (MA)} - \text{同じ年齢集団の平均}}{1/16 \times \text{同じ年齢集団の標準偏差 (SD)}} + 100$$

$$\text{DIQ} = \frac{60\text{か月 (MA)} - 71.3}{1/16 \times 9.6 \text{ (SD)}} + 100 \Rightarrow \text{DIQ } 81.16$$

↓
DIQ 81



田中ビネー知能検査の読み取りについて

田中ビナーV

2歳0か月～13歳11か月

1. 数値的な情報の分析

- ・ 知能指数（IQ）、精神年齢（MA）について
- ・ 基底年齢と上限年齢、その範囲（実施年齢級の範囲）について

2. 各問題に対する反応の分析

- ・ 合格および不合格となった問題の傾向について
- ・ 各問題ごとの詳細な反応分析

3. 思考様式やパーソナリティ特性を反応分析から明らかにする

- ・ 反応分析や観察記録から推察する
- ・ 誤答分析
- ・ 周辺の情報



田中ビネーV

14歳0か月以降→『成人級』として扱う

内容

<結晶性問題>

抽象語／概念の共通点／ことわざの解釈／文の構成／概念の区別

<流動性問題>

積み木の立体構成／マトリックス

<記憶問題>

語の記憶／場面の記憶／数の順唱／数の逆唱

<論理推理問題>

関係推理問題（順番・時間・ネットワーク・種目）／数量の推理（工夫・木の伸び）



①

田中ビネー知能検査Ⅴ 実施日　〇〇年△△月□□日	生活年齢 CA	__歳__か月 :	精神年齢 MA	__歳__か月 :	知能指数 IQ	〇〇
	基底年齢	__歳	知能区分	平均～		

所見

②

1 検査実施場所等

検査実施場所及び検査日	検査名	結果		特記事項
〇〇市児童発達支援センター 〇〇年△△月□□日	田中ビネー知能検査Ⅴ	生活年齢 精神年齢 知能指数	歳　　か月 歳　　か月 〇〇	

2 所見

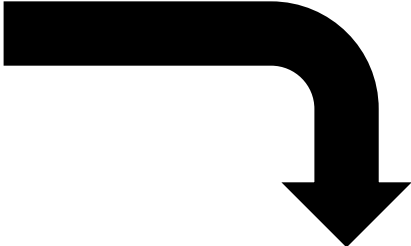
③

記

- 1 氏名　　〇〇　〇〇
- 2 生年月日　△△年△△月△△日
- 3 情報提供事項

田中ビネー知能検査Ⅴ（□□年□□月□□日実施）
生活年齢　　歳　　か月
精神年齢　　歳　　か月
知能指数　　××

- 4 使用目的
☆☆のため



サポートファイルに入っている
検査結果から読み取れる範囲

1. 数値的な情報の分析
 - ・ 知能指数（IQ）、精神年齢（MA）について
 - ・ 基底年齢と上限年齢、その範囲（実施年齢級の範囲）について
2. 各問題に対する反応の分析
 - ・ 合格および不合格となった問題の傾向について
 - ・ 各問題ごとの詳細な反応分析
3. 思考様式やパーソナリティ特性を反応分析から明らかにする
 - ・ 反応分析や観察記録から推察する
 - ・ 誤答分析
 - ・ 周辺の情報

検査結果から得られる情報は、



- ・ 数値から読み取れるもの

- ・ 所見に記載されている内容 に限られてきます。

さらに知るためには、検査の中身を見ていく必要があるということになります。

田中ビネーの結果の読み取り例

ケース1

生活年齢：5歳0か月（60か月）

精神年齢：3歳0か月（36か月） → 精神年齢36か月 ÷ 生活年齢60か月 × 100 → IQ60

<読み取り例>

→ 約2年程度の発達に遅れが見られる

→ 学年相応の課題は難しいため、教材や支援内容を発達年齢に合わせて調整していきましょう。

学習面だけでなく生活・社会性の支援にも活かす。

（例 日常生活場面で「靴、履こう」など、2語文程度で伝えましょう など）



ケース2

生活年齢：8歳0か月（96か月）

精神年齢：8歳0か月（96か月） → 精神年齢96か月 ÷ 生活年齢96か月 × 100 → IQ100

<読み取り例>

→ 全体的に年齢相応の発達が見られる

→ 学年相応の課題を行っていく中で、問題（主訴など）が見られれば、学習面の遅れでなければ、それはどういったところからくるのかを、把握するためにさらなる検査をしていくのか、環境面の調整なのか、手先のぎこちなさは？運動面は？生活の様子は？遊びの様子は？など様々な観点から検討を実施していきましょう など



サポートファイルの中にある検査結果からだけでは、読み取れない内容

ケース3

特定領域が遅れ（または突出）が見られるケース



生活年齢4歳0か月 精神年齢4歳0か月でIQは100 ここまでは分かったが、

しかし…以下の情報は、基本的に記載されていないことが多い。



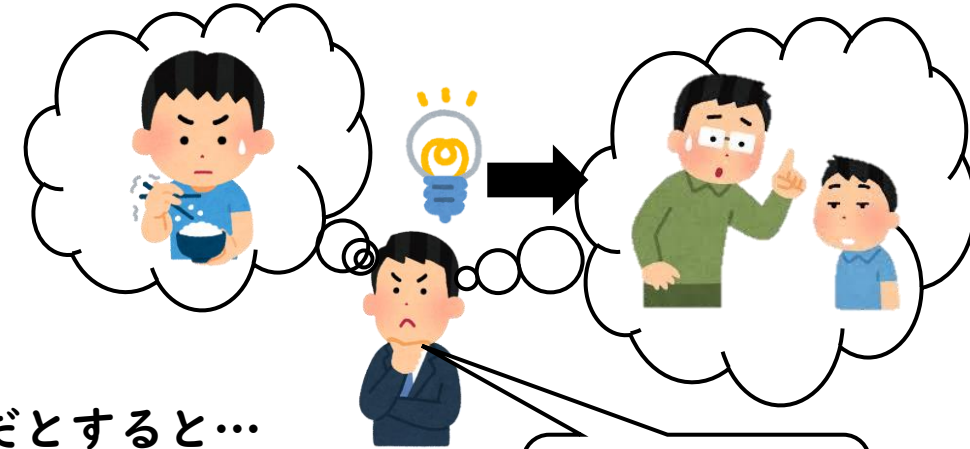
4歳級の“語彙（絵）”については通過したが、
3歳級の“小鳥の絵の完成”課題では不通過 などといった情報は、検査者のみしか分からないことが多いです。

読み取り

→言葉の語彙は年齢相応だが、手先の動作がぎこちない可能性あり
など（不通過の際の様子も解釈のポイントとなる）

さらに…

5歳級の“三角形の模写”が通過（合格基準に達していた）
2歳級の“簡単な指図に従う”は不通過

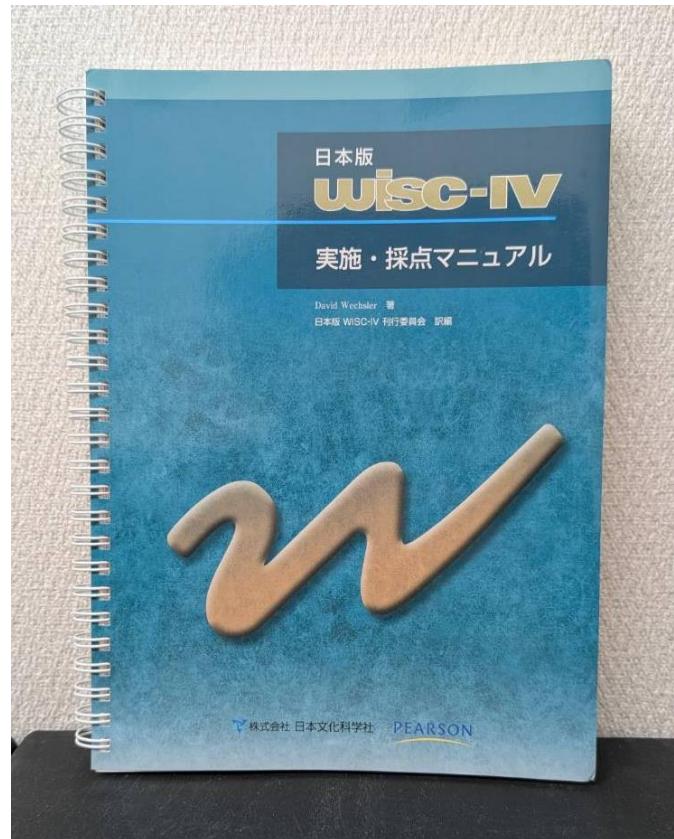


だとすると…

主訴や普段の
様子は・・・

生活年齢（4歳0か月）よりも高い“三角形の模写”（5歳級）が合格基準に達しているため、
3歳級の“小鳥の絵の完成”が不通過だった理由は、手指技能のぎこちなさではなく、
「足りない部分に絵を描いて」といった説明では、理解が困難な可能性があるのかもしれないということになる。
また、4歳級の“語彙（絵）”は通過しているから、物の「語彙」は知っているかもしれないが、
2歳級の“簡単な指図に従う”が不通過になっているため、「長い説明は理解が困難かも」という
解釈がより信頼性と妥当性を高めるかもしれない…ということになっていきます。

WISCについて



サポートファイルで見える際に、記載されていること

WISC - IV：パターン①

WISC - IV 検査結果報告書

レポート出力日：□□/□□/□□

受験者：□□ □□

性別：□□
利き手：□

学校：□□小学校

学年：□
実施回数：□

生年月日：□□/□□/□□

検査実施日：□□/□□/□□

検査場所：□□□□

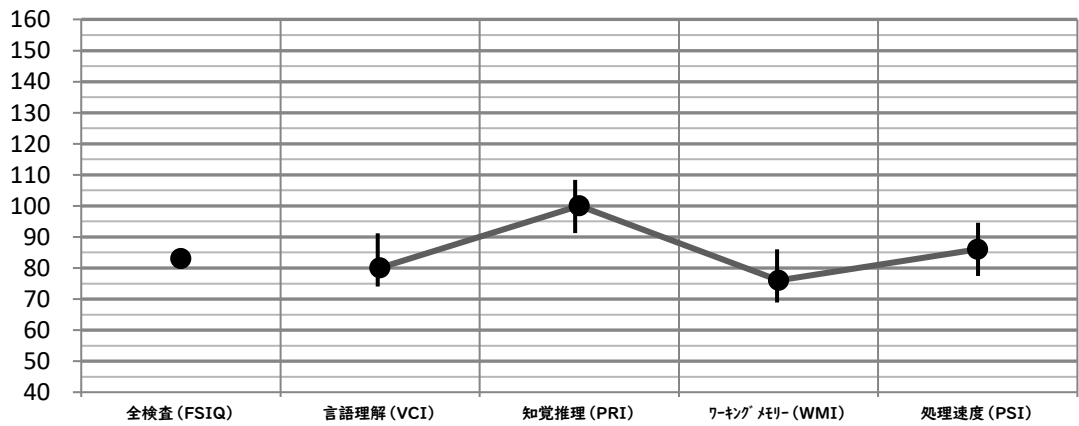
検査時年齢：□歳□月

検査者：□□ □□

検査理由：□□のため

【合成得点】	評価点合計	合成得点	パーセン タイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123 - 132	高い - 非常に高い
言語理解指標 (VCI)	100	100	100	90 - 110	100 - 110
知覚推理指標 (PRI)	100	100	100	90 - 110	100 - 110
ワーキングメモリー指標 (WMI)	100	100	100	90 - 110	100 - 110
処理速度指標 (PSI)	100	100	100	90 - 110	100 - 110

合成得点プロフィール



1 検査実施場所

検査実施場所及び検査日	検査名	結果	特記事項
□□□□ □年□月□日	WISC - IV知能検査 検査時の年齢○：○	全検査 (FSIQ) 128 言語理解 (VCI) ○ 知覚推理 (PRI) ○ ワーキングメモリー (WMI) ○ 処理速度 (PSI) ○	

2 所見

サポートファイルで見える際に、記載されていること

WISC - IV：パターン②

検査結果報告日 □年 □月 □日

WISC - IV 検査結果報告書

【受験者】

氏 名 : □□ □□ 男・女 検査年月日 : □年□月□日
生年月日 : □□年 □月 □日 検査者 : □□ □□
生活年齢 : □歳□か月 検査場所 : □□ □□室
所 属 : □□立□□小学校 検査目的 : □□のため

【検査結果】

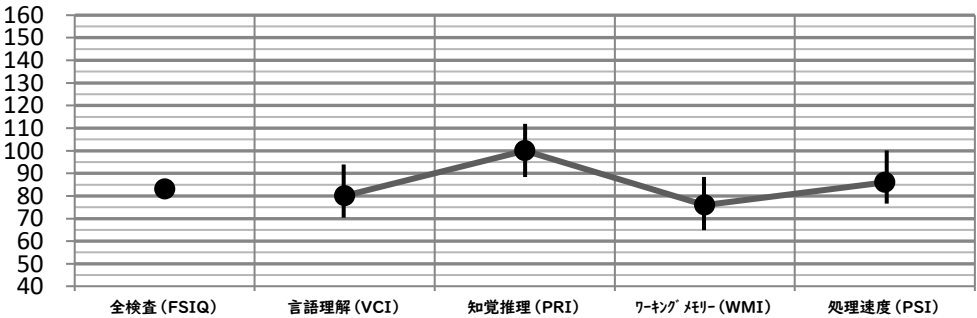
	合成得点	パーセンタイル	信頼区間 (90%)	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	83	5	79 - 89	低い(境界域) - 平均の下
言語理解指標 (VCI)	○○	○	○○ - ○○	○○ - ○○
知覚推理指標 (PRI)	○○	○	○○ - ○○	○○ - ○○
ワーキングメモリー指標 (WMI)	○○	○	○○ - ○○	○○ - ○○
処理速度指標 (PSI)	○○	○	○○ - ○○	○○ - ○○

- ・言語理解指標 (VCI) …言語的な情報や知識を状況に合わせて応用させる力
- ・知覚推理指標 (PRI) …視覚的な情報を分析する力や部分間の関連性を非言語に類推する力
- ・ワーキングメモリー指標 (WMI) …注意を持続させ聴覚的な情報を正確に取り込み、記憶をし、その情報を加工する能力
- ・処理速度指標 (PSI) …視覚的な情報を正確にすばやく処理していく能力

○全体的な知的発達水準

○指標からうかがえる特徴

【支援と方針】



サポートファイルで見える際に、記載されていること

WISC - IV：パターン③

WISC-IV 検査結果報告書

■検査者
□□ □□

■受験者
氏名 □□ □□ さん

■性別
□□

■利き手
□□

■居住地域
(都道府県名) □□県

■所属(学校・園)
□□小学校 □ 年生

■検査実施日
□□年 □月 □日

■実施場所
□□室

■生年月日
□□年 □月 □日

■検査時年齢
□歳 □ヶ月

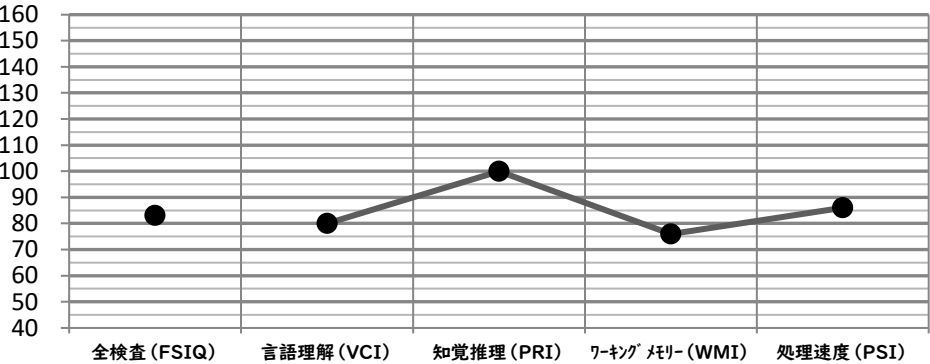
■所要時間
合計 □時間 □分

■検査の目的
〇〇と今後の支援のため

■合成得点プロフィール

合成得点	合成得点	信頼区間	90%	パーセンタイル順位
全検査(FSIQ)	83	79-89	13	
言語理解(VCI)	80	75-89	9	
知覚推理(PRI)	100	93-107	50	
ワーキングメモリー(WMI)	76	71-85	5	
処理速度(PSI)	86	80-96	18	

有意差の評価 (15 %水準)		
言語理解(VCI)	<	知覚推理(PRI)
言語理解(VCI)	なし	----(WMI)
言語理解(VCI)	なし	処理速度(PSI)
知覚推理(PRI)	>	----(WMI)
知覚推理(PRI)	>	処理速度(PSI)
----(WMI)	なし	処理速度(PSI)



所見

【検査中の様子】

【全検査IQ】

【全体的な強みや弱みについて】

上記の結果から、

【推奨される支援案】

①

②

③

WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

評価点（合計）とは？

→各下位検査で算出される評価点を足し合わせた合計値のこと

WISCの各下位検査は「粗点（正答数など）」から標準化された評価点（0～19：平均10）に換算される

例：言語理解指標（VCI）を示す評価点合計が20の場合

言語理解指標を示す項目は（WISC－IVの場合）

「類似」「単語」「理解」

$12 + 3 + 5 = \underline{20}$

＊合成得点に換算前の中間値（平均30前後）

WISC-IV 検査結果報告書

受験者 : □□ □□

学校 : □□小学校

生年月日 : □□/□□/□□

検査実施日 : □□/□□/□□

検査時年齢 : □歳□月

検査者 : □□ □□

性別: □□

学年: □

検査場所 : □□□□

検査理由 : □□のため

レポート出力日: □□/□□/□□

利き手: □

実施回数: □

【合成得点】					
	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標 (VCI)	20	80	9	75-89	低い-やや低い
知覚推理指標 (PRI)	00	00	0	00-00	00-00
ワーキングメモリー指標 (WMI)	00	00	0	00-00	00-00
処理速度指標 (PSI)	00	00	0	00-00	00-00

合成得点プロフィール

WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

合成得点とは？
→指数IQそのもののこと

評価点合計値を「換算表」で合成得点
(平均100、SD15の標準得点)に変換された数値

例 言語理解指標の評価点合計が20の場合
「換算表」では、80となっています。

つまり、80が合成得点 (IQ) となります。

WISC-IV 検査結果報告書

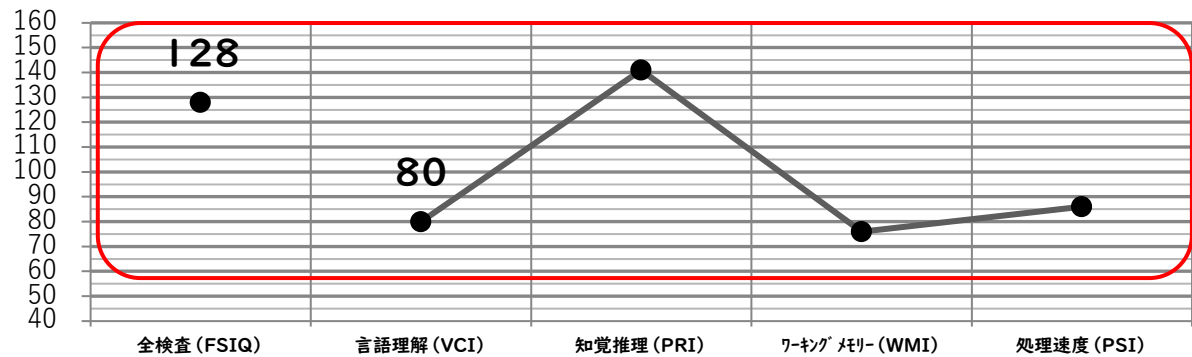
受験者 : □□ □□
学校 : □□小学校
生年月日 : □□/□□/□□
検査実施日 : □□/□□/□□
検査時年齢 : □歳□月
検査者 : □□ □□

性別 : □□
学年 : □
検査場所 : □□□□
検査理由 : □□のため

レポート出力日 : □□/□□/□□
利き手 : □
実施回数 : □

	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標(VCI)	20	80	9	75-89	低い-平均の下
知覚推理指標(PRI)	00	00	0	00-00	00-00
ワーキングメモリー指標(WMI)	00	00	0	00-00	00-00
処理速度指標(PSI)	00	00	0	00-00	00-00

合成得点プロフィール



WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

パーセンタイルとは？

→得点を低い方から並べた時の順位を％で表した数値
比較集団の中で、その子よりも得点の低い子どもが
何％いるか を表す

【イメージ】

例1 パーセンタイルが50だった場合は、
100人中上からも下からも50番目に位置しているため、
「平均」に相当

例2 パーセンタイル91だった場合、
上位9％に位置しているため、
「高い」に相当

【合成得点の目安】

合成得点	パーセンタイル	意味
130	98	上位2％ほど（非常に高い）
120	91	上位9％（高い）
110	75	上位25％（やや高い）
100	50	平均
90	25	下位25％（やや低い）
80	9	下位9％（低い：境界域）
70	2	下位2％（非常に低い）

WISC-IV 検査結果報告書

受験者 : □□ □□

学校 : □□小学校

生年月日 : □□/□□/□□

検査実施日 : □□/□□/□□

検査時年齢 : □歳□月

検査者 : □□ □□

性別: □□

学年: □

検査場所 : □□□□

検査理由 : □□のため

レポート出力日: □□/□□/□□

利き手: □

実施回数: □

【合成得点】

	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標(VCI)	20	80	9	75-89	低い-平均の下
知覚推理指標(PRI)	00	00	0	00-00	00-00
ワーキングメモリー指標(WMI)	00	00	0	00-00	00-00
処理速度指標(PSI)	00	00	0	00-00	00-00

合成得点プロフィール

WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

90%信頼区間とは？
→90%の確率で、この範囲のどこかに本当の能力（IQ）があるはず という数値

＊WISCの得点には、必ず「誤差（測定誤差）がある」
そのため、真の得点とは完全に一致しません。
そこで、90%の確率で、〇〇－〇〇の範囲の中にあるだろう
という数値として示されます。

例 合成得点80 → 90%信頼区間
75－89

90%の確率で、 IQは 75－89 となるだろう
という数値を示す。

（95%水準というものもあるが、同様に95%の確率
でという意味になります。）

WISC-IV 検査結果報告書

受験者 : □□ □□
学校 : □□小学校
生年月日 : □□/□□/□□
検査実施日 : □□/□□/□□
検査時年齢 : □歳□月
検査者 : □□ □□

性別: □□
学年: □
報告出力日: □□/□□/□□
利き手: □
実施回数: □
検査場所 : □□□□
検査理由 : □□のため

【合成得点】					
	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標 (VCI)	20	80	9	75-89	低い-平均の下
知覚推理指標 (PRI)	〇〇	〇〇	〇	〇〇-〇〇	〇〇-〇〇
ワーキングメモリー指標 (WMI)	〇〇	〇〇	〇	〇〇-〇〇	〇〇-〇〇
処理速度指標 (PSI)	〇〇	〇〇	〇	〇〇-〇〇	〇〇-〇〇

合成得点プロフィール

WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

記述分類とは？

→言葉で数値（IQ）を分類したもの

WISCの場合の記述分類の表記（医学的診断ではない）

合成得点 (IQ)	記述分類 (IV)	記述分類 (V)
130以上	非常に高い	極めて高い
120～129	高い	非常に高い
110～119	平均の上	平均の上
90～109	平均	平均
80～89	平均の下	平均の下
70～79	低い（境界域）	非常に低い
69以下	非常に低い	極めて低い

- ・数値だけでは、意味がつかみにくい
- ・学校や保護者・支援者と共有する際に分かりやすくするため
- ・数字の差を「どの程度の位置か」として言語化する

WISC-IV 検査結果報告書

受験者 : □□ □□

学校 : □□小学校

生年月日 : □□/□□/□□

検査実施日 : □□/□□/□□

検査時年齢 : □歳□月

検査者 : □□ □□

性別: □□

学年: □

検査場所 : □□□□

検査理由 : □□のため

レポート出力日: □□/□□/□□

利き手: □

実施回数: □

【合成得点】					記述分類
	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	
全検査IQ (FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標 (VCI)	20	80	9	75-89	低い-平均の下
知覚推理指標 (PRI)	00	00	0	00-00	00-00
ワーキングメモリー指標 (WMI)	00	00	0	00-00	00-00
処理速度指標 (PSI)	00	00	0	00-00	00-00

合成得点プロフィール

WISC知能検査の中で得られる情報について～用語の説明～

有意差の評価とは？

→2つの得点の間に統計的に有意な（意味のある）
差があるかどうかという評価

あらかじめ定めた確率で推定された確率を
有意確率（有意水準）と呼ぶ。

→15%水準というのは、
統計で「偶然による差と判断する確率を15%まで許す」
という意味

差があるかを判断するときに「偶然のばらつき」で
説明できる確率が15%以下なら「差がある」とみなす基準

有意水準5%→「偶然でそうなる確率が5%以下なら「差あり」
有意水準15%→「偶然でそうなる確率が15%以下なら「差あり」

つまり、5%水準は厳密な基準で差があるよ と言っています。

15%水準はゆるい基準で差があるよ と言っています。

ということになります。

■合成得点プロフィール

合成得点	合成得点	信頼区間	90%	パーセンタイル順位
全検査(FSIQ)	83	79-89	13	
言語理解(VCI)	80	75-89	9	
知覚推理(PRI)	100	93-107	50	
ワーキングメモリー(WMI)	76	71-85	5	
処理速度(PSI)	86	80-96	18	

有意差の評価 (15 %水準)

言語理解(VCI)	<	知覚推理(PRI)
言語理解(VCI)	なし	ワーキングメモリー(WMI)
言語理解(VCI)	なし	処理速度(PSI)
知覚推理(PRI)	>	ワーキングメモリー(WMI)
知覚推理(PRI)	>	処理速度(PSI)
ワーキングメモリー(WMI)	なし	処理速度(PSI)



例：上記の場合

- ・言語理解と知覚推理の差に
- ・知覚推理とワーキングメモリーの差に
- ・知覚推理と処理速度の差に

「弱いが注意すべき差がある」と伝えています。

WISCから得られた結果をどう解釈していくか

①個人間差の視点

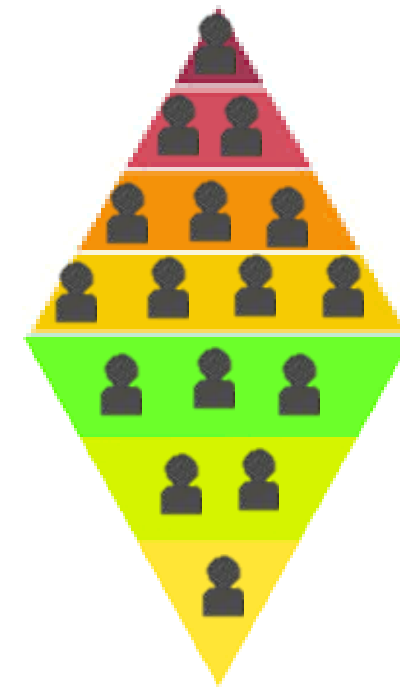
同年齢集団の平均を基準に、集団内における個人の相対的な位置を知る視点
その判断材料は

→合成得点やパーセンタイル順位、信頼区間、記述分類など

②個人内差の視点

指標得点間または評価点間の差の大きさから、認知面の得意・不得意や凸凹の特徴を検討する視点
その判断材料は

→有意性の判定や表現出現率の検討など



WISC - IV : パターン①

WISC-IV 検査結果報告書

受験者 : □□ □□
学校 : □□小学校
生年月日 : □□/□□/□□
検査実施日 : □□/□□/□□
検査時年齢 : □歳□月
検査者 : □□ □□

性別 : □□
学年 : □
検査場所 : □□□□
検査理由 : □□のため

レポート出力日 : □□/□□/□□
利き手 : □
実施回数 : □

【合成得点】

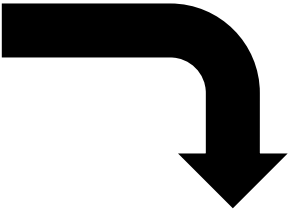
	評価点合計	合成得点	パーセンタイル	90% 信頼区間	記述分類
全検査IQ(FSIQ)	135	128	97	123-132	高い-非常に高い
言語理解指標 (VCI)	00	00	0	00-00	00-00
知覚推理指標 (PRI)	00	00	0	00-00	00-00
ワーキングメモリー指標 (WMI)	00	00	0	00-00	00-00
処理速度指標 (PSI)	00	00	0	00-00	00-00

合成得点プロフィール

WISC - IV : パターン③

■合成得点プロフィール

合成得点	合成得点	信頼区間	90%	パーセンタイル順位	有意差の評価 (15 %水準)	
全検査(FSIQ)	83	79-89	13		言語理解(VCI)	知覚推理(PRI)
言語理解(VCI)	80	75-89	9		言語理解(VCI)	ワーキングメモリー(WMI)
知覚推理(PRI)	100	93-107	50		言語理解(VCI)	処理速度(PSI)
ワーキングメモリー(WMI)	76	71-85	5		知覚推理(PRI)	ワーキングメモリー(WMI)
処理速度(PSI)	86	80-96	18		知覚推理(PRI)	処理速度(PSI)
					ワーキングメモリー(WMI)	処理速度(PSI)



サポートファイルに入っている
検査結果から読み取れる範囲 (赤字)

①個人間差の視点
同年齢集団の平均を基準に、集団内における個人の相対的な位置を知る視点
その判断材料は
→合成得点やパーセンタイル順位、信頼区間、記述分類など

②個人内差の視点
指標得点間または評価点間の差の大きさから、
認知面の得意・不得意や凸凹の特徴を検討する視点
その判断材料は
→有意性の判定や表現出現率の検討

+ αとして 重要な部分として・・・

③所見に記載されている内容

検査結果から得られる情報は、



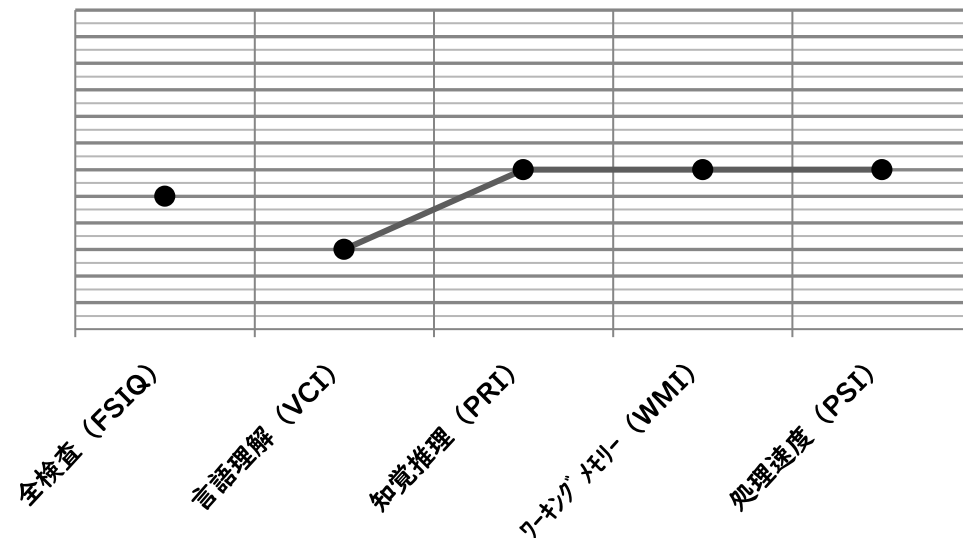
- ・ 数値から読み取れるもの
- ・ 所見に記載されている内容

さらに知るためには、検査の中身を見ていく必要があるということになります。

ウェクスラー知能検査の解釈と指導・支援

WISC-IV（言語理解指標：VCI）

解釈（意味）	言語概念形成、語彙の知識、一般的知識などの習得知識、言葉による推論
関連しやすいつまづきや日常の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の理解（聞く・読む）の弱さ ・表現（話す・書く）の弱さ ・推論（言葉による推論）の弱さ
対策の例	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉や概念の意味理解の習得 ・語彙の知識や一般的知識の獲得のための心理教育的援助（個別指導）など

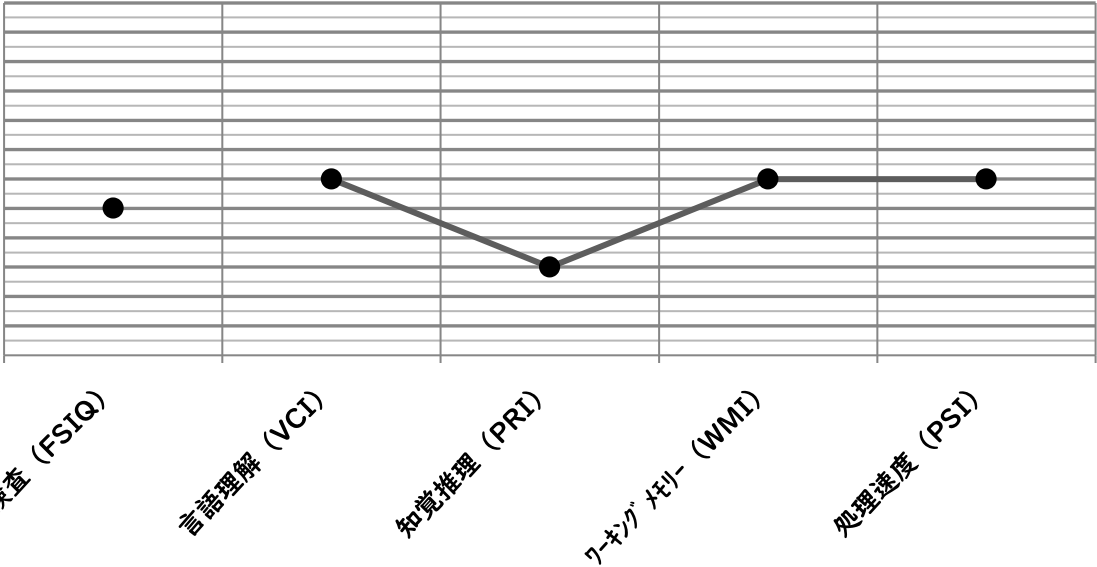


WISC-V (言語理解指標：VCI)

解釈（意味）	言語能力 （特に表現力・説明力・推理力）	習得知識
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・語の想起に時間がかかる ・言葉の理解が流暢でない ・語彙が乏しい ・助詞の使用が不正確（文法の問題）など 	不登校や局限性学習症（SLD）の放置など、学習環境に不備があり、学習空白がある
対策の例	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的手がかりの提示 ・言語表現・言語理解・語彙などのトレーニング 	学習環境の整備

WISC－IV（知覚推理指標：PRI）

解釈（意味）	視覚情報の処理／非言語情報の処理
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none">・ 視覚情報の処理・ ルールの発見・ 見通しを立てる・ 応用する・ 分類やパターンの理解・ 図や地図の読み取り・ 数量関係の把握や数学的思考の弱さ など
対策の例	<ul style="list-style-type: none">・ 視覚情報はシンプルにする・ 目標を明示し、見通しを持たせる・ 問題解決の手順や活動の順序を明示する など



WISC－V（視空間指標：VSI）

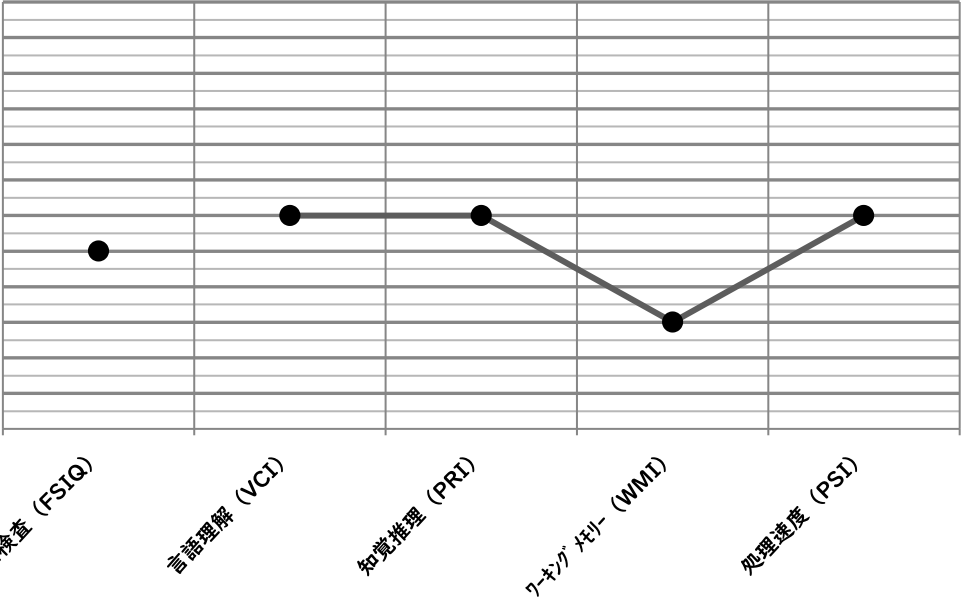
解釈（意味）	視覚イメージ化能力 （視覚イメージの操作を問題解決に活用する能力）
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none">・ 図形描画や定規使用などの困難・ 書字の困難（正しい字形で書くことの困難）・ 片付けの困難・ グラフの読み取りなど
対策の例	<ul style="list-style-type: none">・ 定規などは便利グッズを活用・ ヴィジントレーニング・ 整理整頓された環境の用意と片付けのトレーニングなど

WISC－V（流動性指標：FRI）

解釈（意味）	新奇な課題を計画的かつ柔軟に解決する能力／ 法則を検出する能力（コツをつかむ能力）
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none">・ 学習場面では、応用問題の解決が困難・ 説得力のある説明や文章作成が苦手・ 学習方略の効率が良くない （特に失敗した場合の対応が不十分）
対策の例	<ul style="list-style-type: none">・ コツを伝える・ 伝えるだけでなく、本人にもコツを考えてもらう

WISCーIV（ワーキングメモリー指標：WMI）

解釈（意味）	ワーキングメモリー
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none">・読み、書き、推論の弱さ・注意散漫・聞き間違いによる誤解や思い込み・複雑な計算問題の弱さ・行動制御や実行機能（遂行機能）の弱さ など
対策の例	<ul style="list-style-type: none">・指示は短く、簡潔に、そして繰り返す・学習に必要な刺激は可能な限り排除する・注意をこちらに向けさせてから指示や説明を行うなど

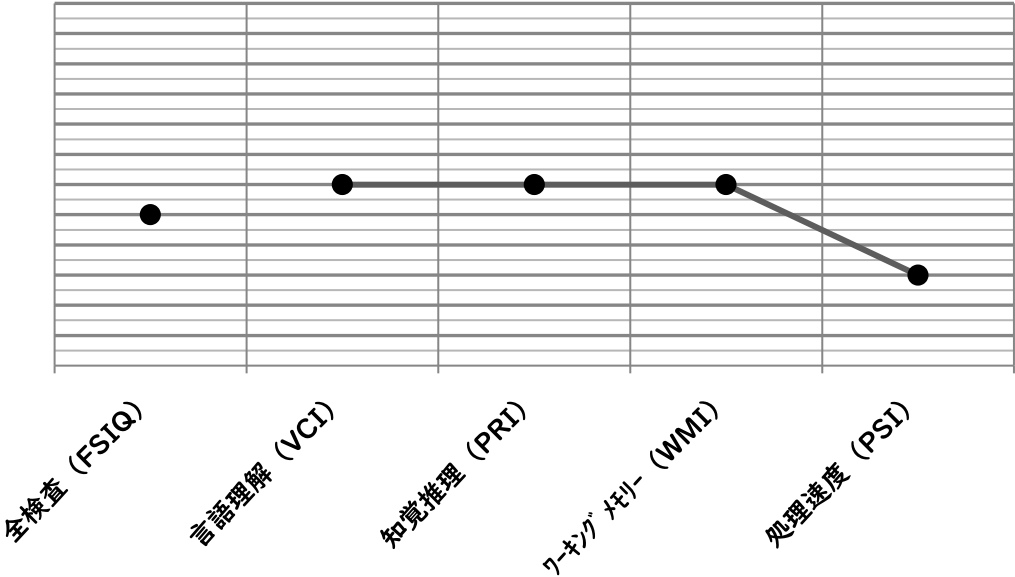


WISCーV（ワーキングメモリー指標：WMI）

解釈（意味）	視覚および聴覚のワーキングメモリー （情報を保持し、加工・整理する能力）
関連しやすいつまづきや 日常の課題	<ul style="list-style-type: none">・今やっていること、今やるべきことを忘れる・見通しが甘かったり、段取りが抜けたりする・マルチタスクが苦手・忘れ物が多い・妨害・雑音・騒音に弱い・暗唱が苦手（九九や百人一首等）など <p><特に聴覚ワーキングメモリーが弱いと></p> <ul style="list-style-type: none">・聞き漏らしや聞き間違いに基づく誤解・勘違いが多い
対策の例	<ul style="list-style-type: none">・視覚的手がかり・ICT・ボイスレコーダーの活用・聞き取りやマルチタスクのトレーニング・忘れ物防止のトレーニング・誤解した学習内容の自覚と修正など

WISC-IV（処理速度指標：PSI）

解釈（意味）	認知処理および描写処理の速度
関連しやすいつまづきや 日常の課題	・板書の書き取りや課題を終えるのが遅い ・急かされると力を発揮できない弱さ など
対策の例	・焦らせない ・板書の負担を減らしてプリントを配布する ・十分な時間を与える など



WISC-V（処理速度指標：PSI）

解釈（意味）	処理速度（作業効率）	集中持続	筆記（書字の基礎）
関連しやすいつまづきや 日常の課題	・他者と同じペースで作業できない ・遅れる など	・単調な作業や中々アイディアが浮かばない時等に、集中が途切れる	・書字における文字の形が不正確 ・漢字を覚えられないなど
対策の例	・タイマーを使用 ・無駄な動線を減らす	・15～20分程度で小休止して、気分転換をする ・集中持続のトレーニングなど	・書きやすい筆記具を用意、あるいはICT活用 ・漢字学習は得意な方略で行う（言語：語呂合わせ／視覚：漢字を絵にする）など

事例紹介（検査の実施と数値からの読み取り）

事例の紹介

小学5年生 男の子

通常級（「情緒級は恥ずかしい」といった思いを持つ→周囲の子が「（支援級行ってる子はバカだから」と言っていたのを聞いてしまったことから本人の希望で通常級で過ごす）

主訴『学習面での心配があり、本人にとってどういう環境や学習方法がいいのかを知りたい』

日頃の様子（困っていること）として

- ・分数は「ワー！」となる。
 - ・漢字は読みは出来るが、書きは難しい（マスを大きくする配慮を家庭でしている）。
 - ・小学1～2年生の時は、座っていないことが多く、学習の積み重ねができず、今も掛け算が難しい
 - ・学習に対して投げやりになっている（保護者に対して「お前の教え方が悪いんだ！」と言う。
- など

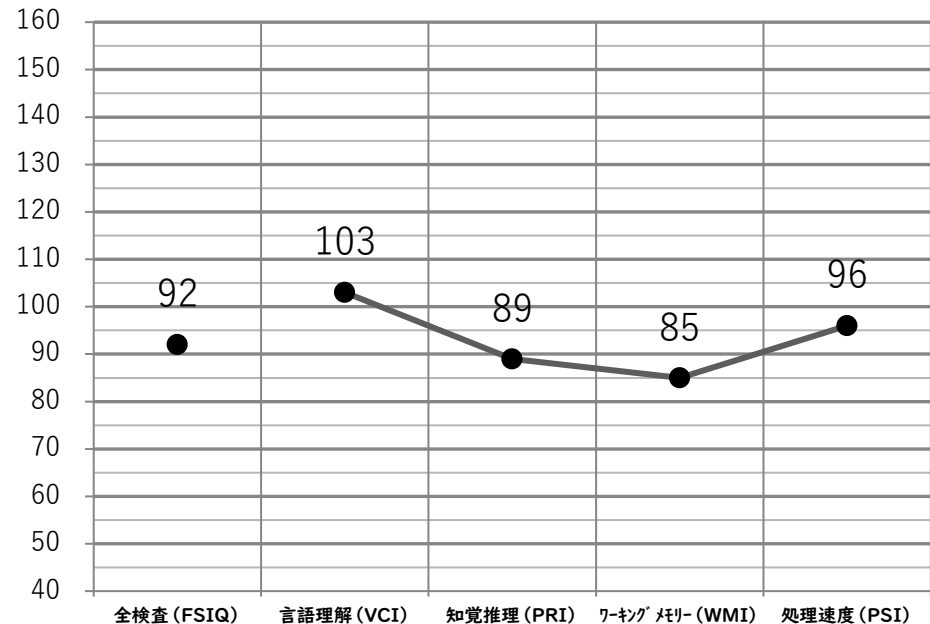


<プロフィール>

■合成得点プロフィール

合成得点	合成得点	信頼区間	90%	パーセンタイル順位
全検査(FSIQ)	92	87-98	30	
言語理解(VCI)	103	96-110	58	
知覚推理(PRI)	89	83-97	23	
ワーキングメモリー(WMI)	85	80-93	16	
処理速度(PSI)	96	89-104	39	

有意差の評価 (15 %水準)		
言語理解(VCI)	>	知覚推理(PRI)
言語理解(VCI)	>	ワーキングメモリー(WMI)
言語理解(VCI)	なし	処理速度(PSI)
知覚推理(PRI)	なし	ワーキングメモリー(WMI)
知覚推理(PRI)	なし	処理速度(PSI)
ワーキングメモリー(WMI)	なし	処理速度(PSI)



<数値から読み取れること>

- 全検査IQは92で、パーセンタイル30ということは、同年齢集団が100人いたら下に30人程度いるということ（知能水準は平均の下～平均の域）
- この中で、平均（平均は50）よりも高い力は、言語理解（パーセンタイル順位58）
- この中で1地番低い数値は、ワーキングメモリー（IQ85→パーセンタイル順位16）
- 言語理解>知覚推理の差が見られる。「弱いが注意すべき差がある」ということ
- 言語理解>ワーキングメモリーの差が見られる。「弱いが注意すべき差がある」ということ

→ざっくり言うと、

強みは、ことばでの説明（理解）やことばでの表現で回答をしてもらうことや、
弱みは、知覚推理やワーキングメモリーの弱さがあるため、これを補うこと

単純な書き作業

＜ここから先は検査中の反応の仕方や普段の様子、
下位検査項目などから読み取っていく内容 → ＊所見を見ていく＞

＜下位検査項目や検査中の様子から読み取れること＞

- ・ 言語理解の中では、理解や単語が高得点で、類似が低い
→ 関連するものをまとめて考えることが苦手かもしれない
→ 単語や理解といった項目が高く、経験を通して得たものは強い
- ・ 知覚推理の中では、行列推理が平均的で、積木模様や補助項目の絵の完成が低い。
（積木模様では、向きが違う模様を作る）
（絵の完成では、「ズボンをはいてない」といった表現など）
→ 細部への注目や複雑な視覚情報が苦手
→ 例：図形問題やグラフなどの読み取りが難しいかも
- ・ ワーキングメモリーの項目は全体的に平均よりやや低い
→ 長文を覚えたり、頭の中で記憶を保持しながら操作することは苦手
→ 暗算や周囲の環境に影響を受けやすいかも
- ・ 処理速度の中では、補助項目の絵の抹消が高い
→ 単純な印付けや筆記の負担が軽いものなら強みかも

<得られた情報とエピソードとの関連>

言語理解の反応から

- ・関連するものをまとめて考えることが苦手かもしれない
 - ・単語や理解といった項目が高く、経験を通して得たものは強い
- 学習の積み重ねができず、今も掛け算が難しい
- 分数は「ワー！」となる



知覚推理の反応から

- ・細部への注目や複雑な視覚情報が苦手
 - ・例：図形問題やグラフなどの読み取りが難しいかも
- FBの中で、算数の図形問題は見た瞬間やらないとのエピソードが出る



ワーキングメモリーの反応から

- ・全体的に平均的に低いことから、長文を覚えたり、頭の中で記憶を保持しながら操作することは苦手
 - ・暗算や周囲の環境に影響を受けやすい（被転導性がある）かも
- 小学1～2年生の時は、座っていないことが多く、学習の積み重ねができず、今も掛け算が難しい

処理速度の反応から

- ・単純な印付けや筆記の負担が軽いものなら強みかも
- 名前を書く際に、3画の漢字は書いたが、それ以外の画数の多い字はひらがなで記入



<得られた情報から支援策へ>

- ・強みは、ことばでの理解や表現で回答をしてもらう、単純な書き作業
- ・弱みは、知覚推理やワーキングメモリーの弱さがあるため、これらを補うこと

これらをベースに本人なりの支援策へと落とし込む

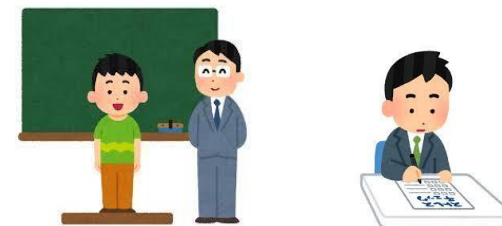


【推奨される支援案】

<強みを活かした支援>

- ・回答や発表の際は、口頭での回答や発表形式にする
- ・ゴミの分別表にペンで印をつけるお手伝いをしてもらう
- ・経験したことや積み重ねた知識は、習得できるといった強みを活かす

→例、小数や分数の説明をする際に、10枚に均等に切ったピザを食べる時に、全体（ピザ10等分）を「1」とした時に、「0.4」というのは、「4枚のことだよ」→「だから10分の4（10枚中4枚）になる」といったように、生活の中で落とし込むなど。



<弱みの補い方>

・書字に負担がかからないように、タブレットを見ながら、繰り返し同じ単元を学習していく。
また、問題の途中式を書くということが困難であれば、式の選択肢を提示して、どれが正しいか選んでいって、回答に近づけていく。



・WMI（ワーキングメモリー）の弱さから、耳から聞いて、一度に留めておける量の少なさが見られることから、説明や指示は、短く簡潔にする。また、長い情報には、図や絵を用意したりするなど、目からの情報でも補ってあげる。
→しかし一方で、図やグラフが難解になると読み取りが難しくなることが想定されるため、ドリルを用いる場合は、答えのページを見ながらどうしてその式になっているのかを1つずつ照らし合わせながら学習を促すなど、図形の読み取りとワーキングメモリーの負荷を減らす方略が有効かもしれない。



・机上には、やる課題のみを出すことや、壁の方を向いて座る等といった、環境面の配慮をしたり、1対1の場面で学習ができる環境を作る工夫をする。→家庭教師の利用など。



知能検査の限界について ～留意点～

＊注意点…何のためにWISCを実施するのか？

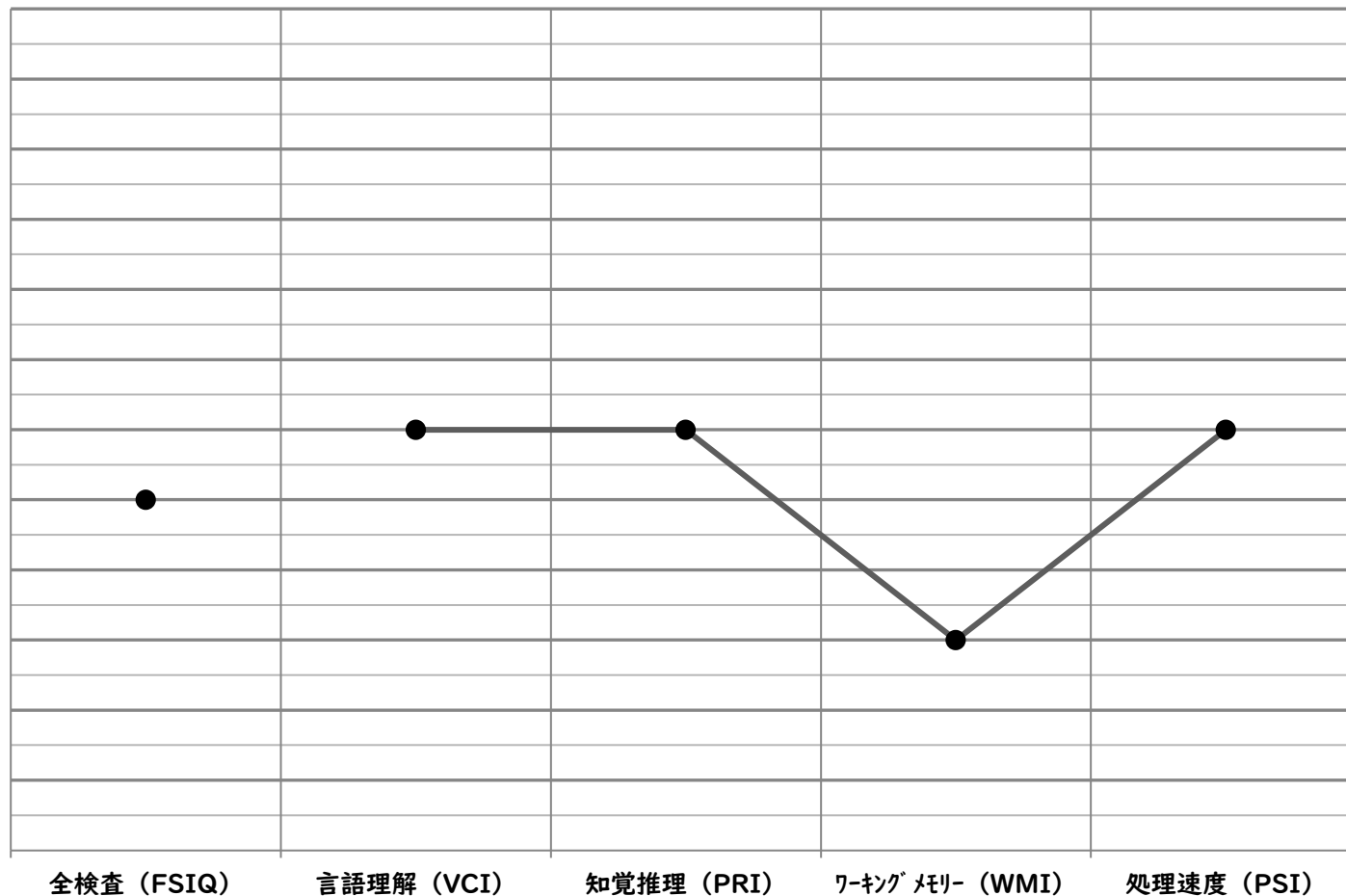
「強みや弱みを知るため」という説明は間違っているわけではないが、

真の目的は、

「受験者のつまづき（＝問題、主訴）の能力的な原因と対応策を知ること」
（大六一志氏）

→基本的に、弱いところが原因となり、強いところを対応策にいかす

主訴例「授業中に、先生の指示を聞いていない」

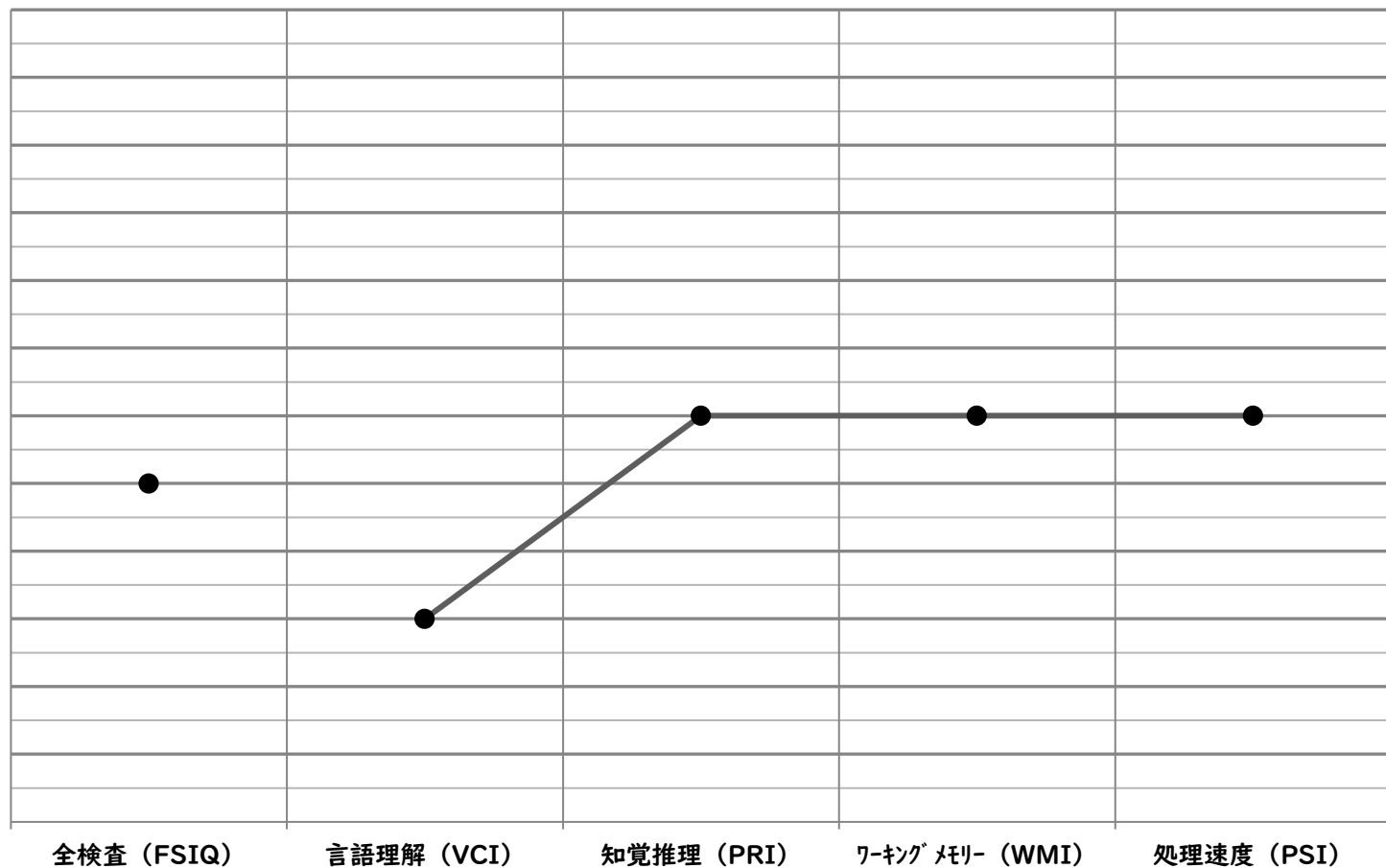


ワーキングメモリー指標が弱い

原因→注意散漫によるもの？

対応策→説明や指示は短く、簡潔にする？

主訴例「授業中に、先生の指示を聞いていない」



言語理解指標が弱い

原因→ことばの理解が難しいことによるもの

対応策→「語彙の知識」や「一般的知識」の獲得を促す？

WISC-Vの場合、世の中の人の95%以上の人で、指標得点間に差（グラフの凸凹）が見られます。
（WISC-IV、WAIS-IVでは90%以上、IQが高い人の方が、指標得点間に凸凹が出やすい傾向がある、一般的に、得点の低い指標は、不得意な領域を示しています）

また、95%以上の人が凸凹があることを考えると、
こういったグラフだと「〇〇といった障害」の可能性はある ということはいえない。

ということになります。

例：注意が散漫で物忘れが多い

→ 検査結果からワーキングメモリーが低いという結果が出たとしましょう。

しかし、本人は、それを自覚し、普段から片付けBOXにしまうようにして、物忘れを防いでいます。

→ 不得意を自力で補償し、日常生活に支障が出ていないため、障害にはなりません。

自力で補償できず、日常生活に支障が出ている場合、障害 ということになっていきます。



*数値やグラフの形ではなく、問題や主訴が日常生活に支障をきたしているのかということがポイントになっています。

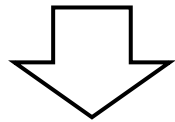
検査結果の解釈は、相談内容（主訴）を説明すること（大六氏.2024）。

例：WISCで、ワーキングメモリー指標が低得点であった場合に、

マニュアルでは（WISC－V理論・解釈マニュアルP.130）・・・

「視覚および聴覚情報を登録し、保持し、操作する能力が弱い」と記載されています。

そこで、
「受験者はワーキングメモリー指標が低得点だから、視覚および・・・操作する能力が弱い」と説明するのは、解釈になっていません。



これはワーキングメモリーの 解説 であって、相談内容（主訴）の説明（解釈）ではありません。

つまり、相談内容（主訴）が分からないと、検査結果を 解釈 することは出来ません。

例として

【主訴（相談内容）】

「授業中に集中ができず、キョロキョロしてしまうことや家で宿題をやっていると、すぐ他が気になって続かない」

であるとする、

それがどうして起きるのかということを、
検査結果から説明することが 解釈 ということになります。



授業中に集中できない
原因や対応策は…

また、田中ビネー知能検査やWISCなどでは、分からないことも多くあります。
2つとも「知能検査」に分類される心理検査であるため、

- ・ 性格特性
- ・ 感情
- ・ 社会性・対人能力・コミュニケーションスキル
- ・ 日常生活能力
- ・ 問題行動の直接の原因
- ・ 運動能力 など は分かりません。

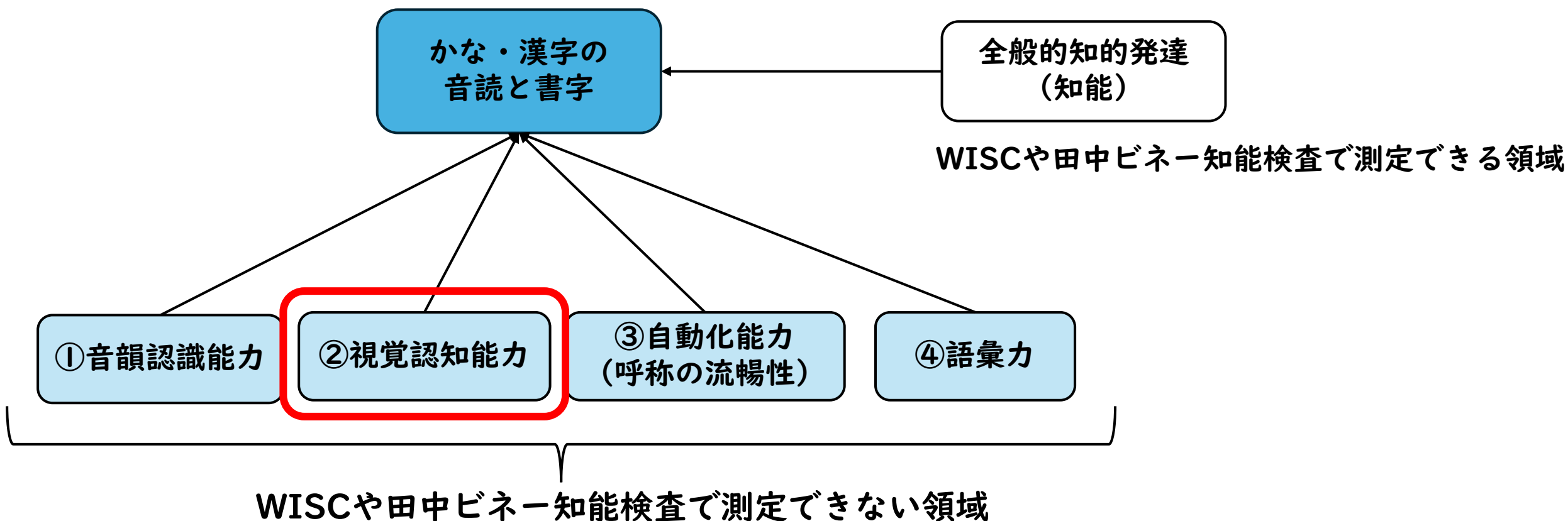


また、
田中ビネー知能検査では、WISCのような能力の領域を分けて、得意・不得意を調べることは難しい
→発達の初期には認知は未分化のため、多種多様な課題や発達の指標となるような課題を集めた形式の方が役に立ちます。

WISCは知能検査ですが、アセスメントできる領域は限られています。

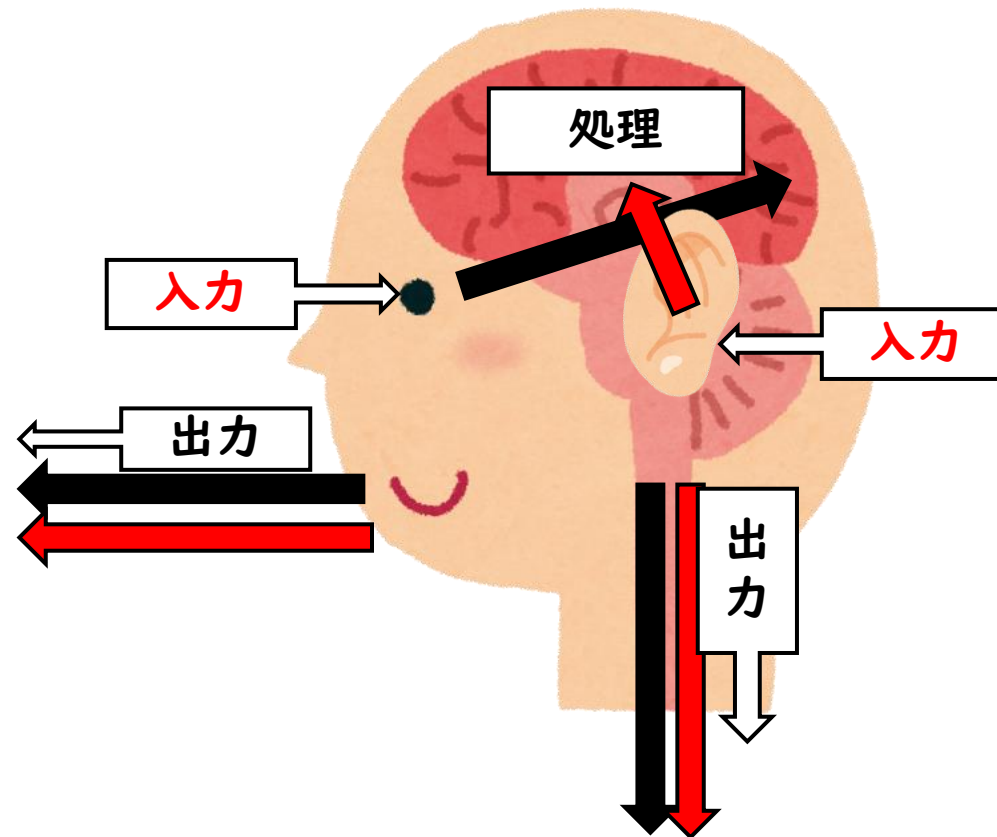
「対象者の相談内容（主訴、困難、つまずき）を検討し、仮説を立てると、
どの能力を測定すべきかが決まっていきます（大六氏.2024）。」

例：読み書きのアセスメントはWISCや田中ビネー知能検査ではアセスメントできないため、
読み書きとその原因の検査を実施する必要があるということになります。



認知特性

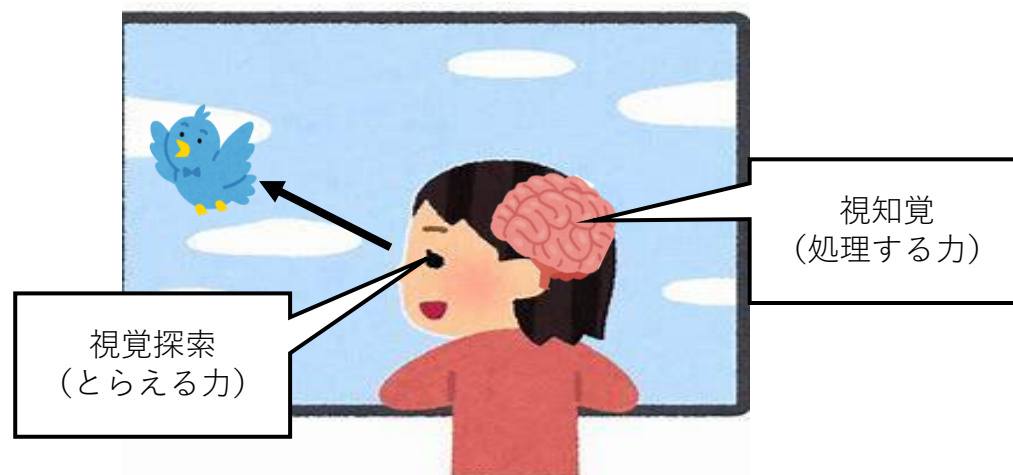
- ・認知アセスメントの全体像
(認知の3段階「入力」→「処理」→「出力」)



入力

【視(覚)機能のアセスメント】

視(覚)機能・・・「視覚探索(捉える力)」と「視知覚(処理する力)」



これらの脳内の情報処理に何らかの問題がある場合、見る力は大きく阻害されることになる。
空間知覚が阻害されると運動面
形態知覚が阻害されると学習面
に大きな影響が出る。

「視覚探索(捉える力)」

物を見ようとするときに使う3種類の眼球運動

追従性眼球運動

常に視線をわせるように眼球を動かす

跳躍性眼球運動

瞬時にジャンプさせる眼球運動

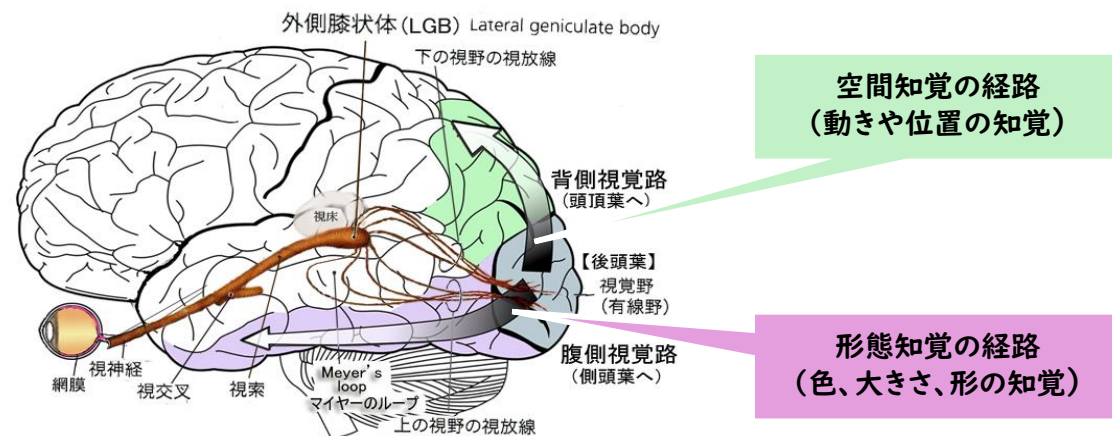
より目運動

近くのものに焦点を合わせる両目内側に動かす眼球運動

「視知覚(処理する力)」

運動面…空間知覚

学習面…形態知覚



形態知覚の異常の例

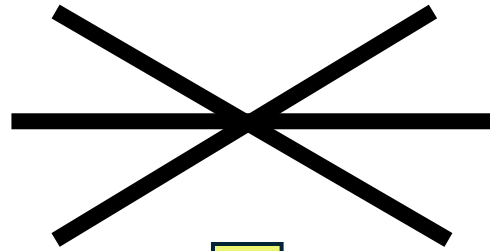
左右逆転（鏡文字）

起承転結

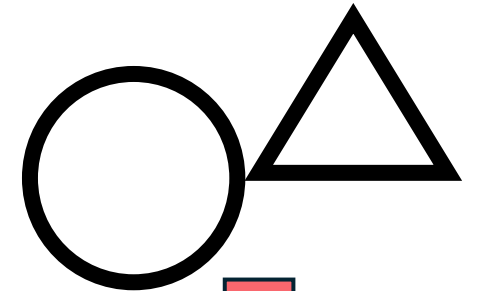


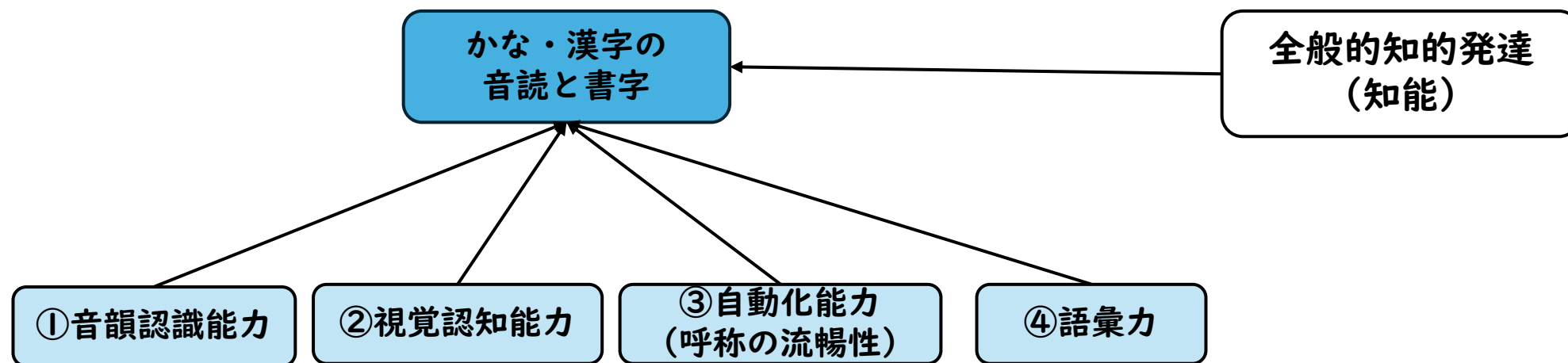
結承起

連続性の誤り



形のゆがみ





- ・発達性読み書き障害の原因①：音韻認識 → ELC (Easy Literacy Check) など
- ・発達性読み書き障害の原因②：視覚認知 (書字に影響) → WAVES、Rey複雑図形検査 など
- ・発達性読み書き障害の原因③：自動化 (呼称の流暢性) → STRAW-RのRAN など
- ・発達性読み書き障害の原因④：語彙 → KABC-IIの語彙尺度、標準抽象語理解力検査 (SCTAW) など

読み書き、及びその障害の原因を調べるためには、読み書きの検査を行う必要がある
例として・・・速読 (=流暢性) の測定が重要 → STRAW-R、URAWSS-II など

まとめ

サポートファイルで心理検査を見た際には・・・

- ・数値や所見を見てみましょう。
- ・対応策を考える場合には、主訴を確認したり、日頃の様子などをよく観察し、検査結果と照らしあわせていくことが重要となります。

ご清聴いただきありがとうございました。

引用文献・参考文献

杉原一昭・杉原隆監修 中村淳子・大川一郎野原理恵・芹澤奈菜美（2003）田中ビネー知能検査V理論マニュアル.一般財団法人田中教育研究所

杉原一昭・杉原隆監修 中村淳子・大川一郎野原理恵・芹澤奈菜美（2003）田中ビネー知能検査V実施マニュアル.一般財団法人田中教育研究所

杉原一昭・杉原隆監修 中村淳子・大川一郎野原理恵・芹澤奈菜美（2003）田中ビネー知能検査V採点マニュアル.一般財団法人田中教育研究所

大六一志（2024）「日本版WISC - V - 理論的背景、解釈と指導・支援」未公刊資料

上野一彦・松田修・小林玄・木下智子（2015）日本版WISC - IVによる発達障害のアセスメント：代表的な指標パターンの解釈と事例紹介.日本文化科学社

上野一彦・藤田和弘・前川久男・石隈利紀・大六一志・松田修（2010）日本版WISC - IV知能検査 実施・採点マニュアル.株式会社日本文化科学社